

【現状チェック】「自信のなさ」が刺さり、「完璧」が流される理由

再現できない「刺さる」瞬間

狙って書いた時ほど無風。弱音を吐いた時ほど届く。

今のあなたの「違和感」

- 自信がない状態で、こっそり出した投稿に大きな反応がつく
- 丁寧に整え、自信満々で出した投稿は驚くほどスルーされる
- なぜ届いたのか、なぜ届かなかったのかの理由が分からない
- 感覚に頼る発信に限界を感じ、再現したいのに波がある

— 状態：共鳴の「本質」と「形式」の逆転 —

整えすぎて、 「人間味」を消していないか。

- 自信がない時の言葉には、心の「揺れ」や「温度」が宿る
- 説明よりも「体験」が前にあり、生身の感情が漏れ出ている
- 未完成な言葉が、読み手が入り込む「余白」を創っている

原因の核心

不完全さが生む接続 / 体温の漏洩

「正しい説明」は頭で理解されますが、「揺れる本音」は心で共鳴されます。

「綺麗に書かなければならない」という呪いを解く

「上手さ」は、 価値ではない。

× 捨てていい誤解

正しい構成こそが正義だ
情報量が多ければ刺さる
綺麗な文章ほど記憶に残る

○ 新しい基準

不完全さが「親近感」を呼ぶ
結論を急がない「余白」の力
正しさよりも「手触り」を優先

誰にも否定されない文章は、誰の心も動かさない

完璧に整えるほど、相手の心に引っかかる「トゲ（個性）」が消えてしまいます。

「感情の揺れ」を設計に組み込む

【場面】 感情が揺れた瞬間をそのまま置く

↓

【具体】 小さな「事実」を一つだけ添える

↓

【余白】 説明を減らし、結論を急がない

一人の状況を丁寧に描き、読み手が自分の記憶を投影できる隙間を作る。

構造を変えると、反応の「質」がこう変わります

「自分のこと」として響き出す

- 流される正論 → 読み手が立ち止まり、情景が浮かぶ
- 表面的なりアクション → 「わかる」という深い共感の発生
- 一過性の投稿 → 記憶に刺さり、あとで思い出される
- 偶然のヒット → 再現性のある「共鳴投稿」の設計へ

「不器用な本音」を一つ置く

1. 最近、心が揺れたことを一つ思い出す（小さくていい）
2. その瞬間を一文で、そのまま書く（整えない）
3. その時の具体的な事実（天気、音、色など）を一つ添える
4. 迷っている状態なら、迷ったまま文章を終わらせる
5. 綺麗な「言い換え」をすべて削除し、生身の言葉に戻す
6. 特定の一人に向けて、語りかけるように投稿する

「整えすぎ」を検知する基準

点検項目

- ✓ 感情の「揺れ」を消していないか？
- ✓ 結論を急ぎすぎて、余白を消していないか？
- ✓ 文章が「顔の見えない正解」になっていないか？

得られる効果

刺さった理由の論理的な分解
無風投稿への感情補正
再現性の高い「接続」の固定
自分らしい発信軸の回復

立ち止まるたびにここに戻り、不完全な自分の声を許してください。

不完全さを武器に、本音で繋がる

「揺れ」を、肯定する。

過去の「刺さった」投稿から、揺れた一文を抜き出す
次の三投稿分、意図的に「未完成」を配置する

迷ったら再点検。不完全さが、あなたへの入口です。